## 韓国の地域，在宅ケアと日本との比較

家族・地域支援学科　山路　憲夫

2009年に始まった韓国老人長期療養保険（日本の介護保険制度にあたる）について，2009年に引き続いて，韓国保健家族福祉部（日本の厚生労働省にあたる）ヒアリング＝医療制度，病院と診療所を中心とした地域医療，地域ケアの現地調査等を実施する予定だったが，日本での地域包括ケア体制構築（2012年度からスタート）という実践的課題研究の必要から，山路らが在宅ケアの多職種連携を目指して設立したNPO福祉フォーラムジャパン（2009年11月東京都から正式に認証）の活動の一つとして特別養護老人ホームを廃止したデンマークネズドヴェズ市に調査・研究を実施（メンバー24人，山路は団長として参加），さらに2010年8月，家庭医導入を柱としたドイツの医療制度改革の現状と課題について，ドイツ調査も実施したため，2010年度の韓国調査を見送らざるを得なかった。

以上の事情があったとはいえ，研究助成を活用できなかったことをおわびしたい。韓国老人長期療養保険のその後の展開についてはさらにフォローしていく。



## 縦断的インタビュー調査による児童期の自己概念の発達

発達臨床学科　佐久間　路子

**【目的】**

幼児期以降の自己概念の発達については，これまでにDamon & Hart（1988）による自己理解モデルやHarter（1999）による認知社会的構成概念としての自己の発達モデルが示されている。また佐久間（2006）は，幼児期・児童期を対象にしたインタビューおよび青年期を対象とした質問紙調査によって，幼児期から青年期にかけての自己概念の発達モデルを実証的に示している。このような発達的変化を明らかにするためには，縦断研究が不可欠であるが，これらの研究のほとんどは，横断的な調査に基づいているのが現状である。そして，これまで縦断調査に基づく個人内の変化は解明されていない。また自己概念の研究において，自分が成長していくことを子ども自身がどのように認識しているのかを明らかにした研究はほとんどない。子どもは自己の発達（成長）をどのように捉え，それをどのように自己の成長への期待につなげていくのかを検討することは，児童期の自己理解の発達に新たな観点を提示するものといえる。

佐久間は，科研費若手研究（B）の補助をうけ，2005年度～2009年度までの5年間で，幼稚園５歳児から小学校６年生までを対象に，幼児期・児童期における自己概念の発達を研究課題として，縦断追跡的に，自己の成長（過去から現在，現在から未来への変化）の認識を含む自己理解インタビューを行ってきた。そのうち前半の3年間の研究結果として，幼児期および小学校低学年の自己の成長の認識について肯定的に捉えていること，さらに対象者が小学校中学年に入り，自己の成長（未来への変化）を必ずしも肯定的に捉えていないことを明らかにしている(佐久間, 2008)。

2010年度に行った本研究では，これまで5年